

予防教育的アプローチによる 大学生のレイプ神話受容態度の変容

0011 北風菜穂子¹⁾ 伊藤武彦²⁾ 井上孝代³⁾

1) 明治学院大学大学院心理学研究科 2) 和光大学 3) 明治学院大学

2008年度日本コミュニティ心理学会 会場: 愛知学院大学

2008/06/14~15

問題の背景

- レイプ被害女性の**9割**が加害者を知っている

(男女間における暴力に関する調査, 内閣府 2005)

= 顔見知りからのレイプ (Date/Acquaintance Rape)

- **ステレオタイプ**がデートレイプを否認する

「凶器を持った見知らぬ男が藪かげから襲い掛かってきて、被害者は若くて魅力的で、大声をあげて抵抗し、すぐに警察に届ける」

- レイプ被害者への**偏見**が存在する

「レイプの被害者にも落ち度がある」

問題

- Frese, Moya & Megias (2004)

レイプ神話受容は顔見知りのレイプにおいて、被害者の責任を大きく認知し、心的外傷の程度を矮小化する働きをもつ

日本においても、レイプ被害者への
偏見(Rape Myth)低減の必要性は大きい



教育による偏見低減の可能性については
十分に研究されていない

目的

レイプに関するスライド教材の視聴の前後での

- レイプ神話受容
- レイプに対する社会的認知

の変化を明らかにする

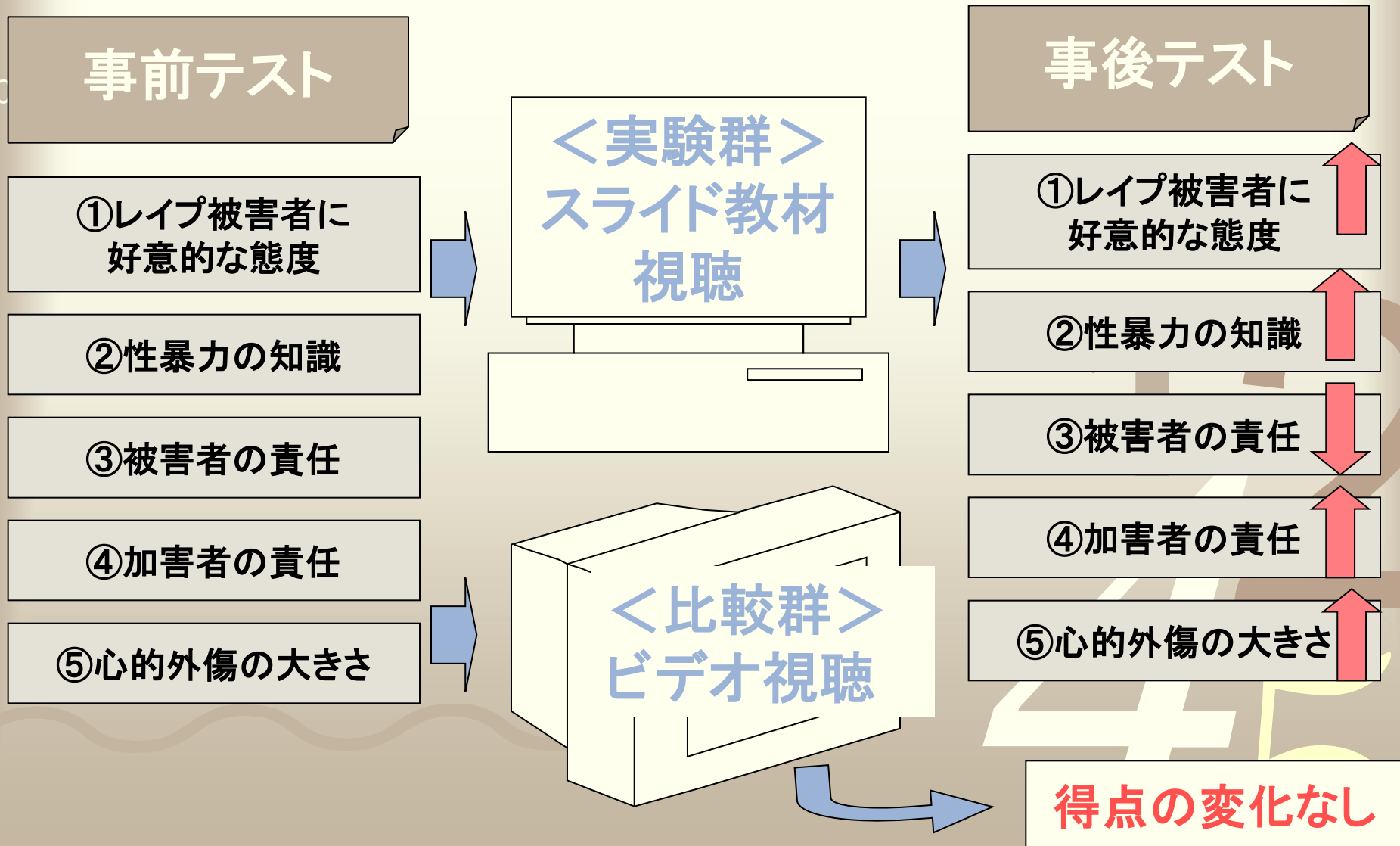
5つの予測

- 1 レイプ被害者に好意的な態度得点の増加
- 2 知識問題の正答の増加
- 3 被害者責任帰属得点の低下
- 4 加害者責任帰属得点の増加
- 5 心的外傷の推定の得点の増加

方法

1. 実験期間： 2007年11月
2. 実験参加者： 首都圏私立大学の学生403名
有効回答243名(男145名, 女98名, M=21.1歳)
3. 実験手続き：大学の授業時間に事前事後テストおよびメディア教材の視聴を行った
4. 効果の測定に用いた変数
 - レイプ神話受容を測定する翻訳版Rape Supportive Attitude Scale 17項目(Lottes, 1998 片岡・堀内・森訳 2001)
 - 性暴力に対する知識問題13項目 (片岡ら, 2001)
 - レイプシナリオ(知人, 夫婦, 未知, デートの4場面)
(Frese et al., 2004を一部加筆)
 - レイプの社会的認知
《被害者責任, 加害者責任, 心的外傷の程度》

実験デザイン(不等価事前事後テストデザイン)



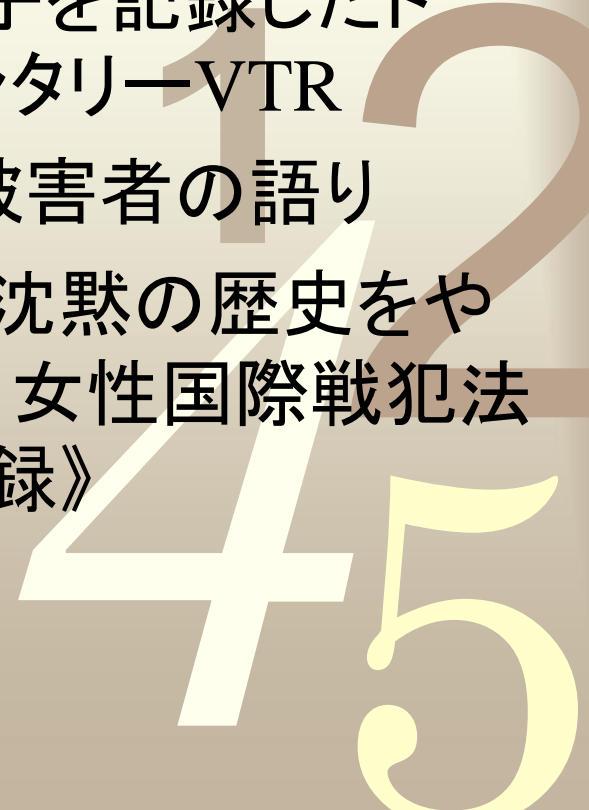
教材の内容

00 スライド視聴群

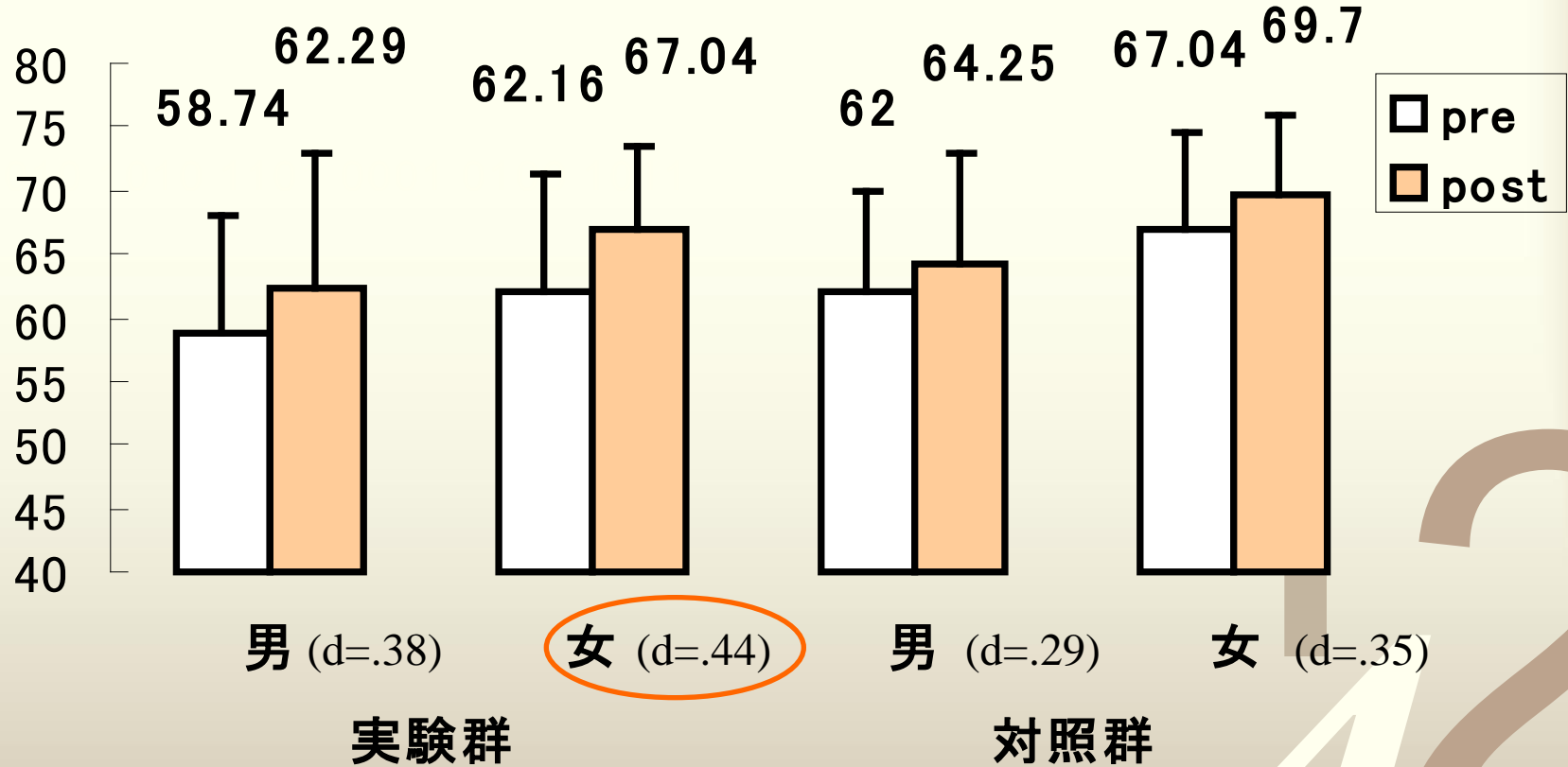
- 筆者ら作成のスライド
- レイプ神話の誤りについての説明, 顔見知りレイプについての説明を内容に含む。
- 出典:《レイプの二次被害を防ぐために》(アジア女性基金)

ビデオ視聴群

- 戦時レイプの被害者が出演し, 国際法廷で証言する様子を記録したドキュメンタリーVTR
- レイプ被害者の語り
- 出典:《沈黙の歴史をやぶって 女性国際戦犯法廷の記録》



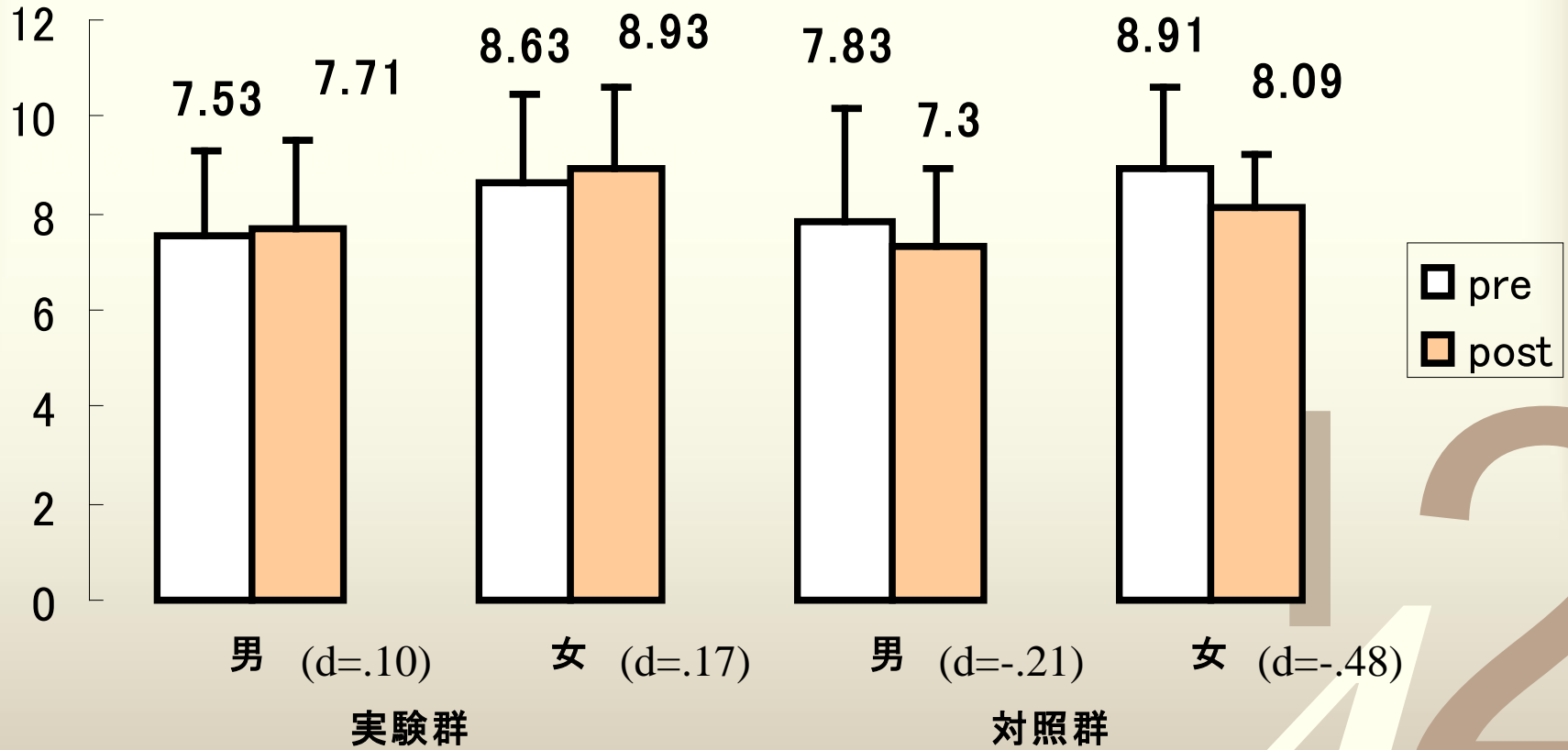
結果 レイプ被害者に対する態度



- 時間の主効果あり 男: $F(1,143) = 8.331, p = .005$, 女: $F(1,96) = 24.003, p < .001$
- 時間 × 群の交互作用 n.s.

※d=効果量ES

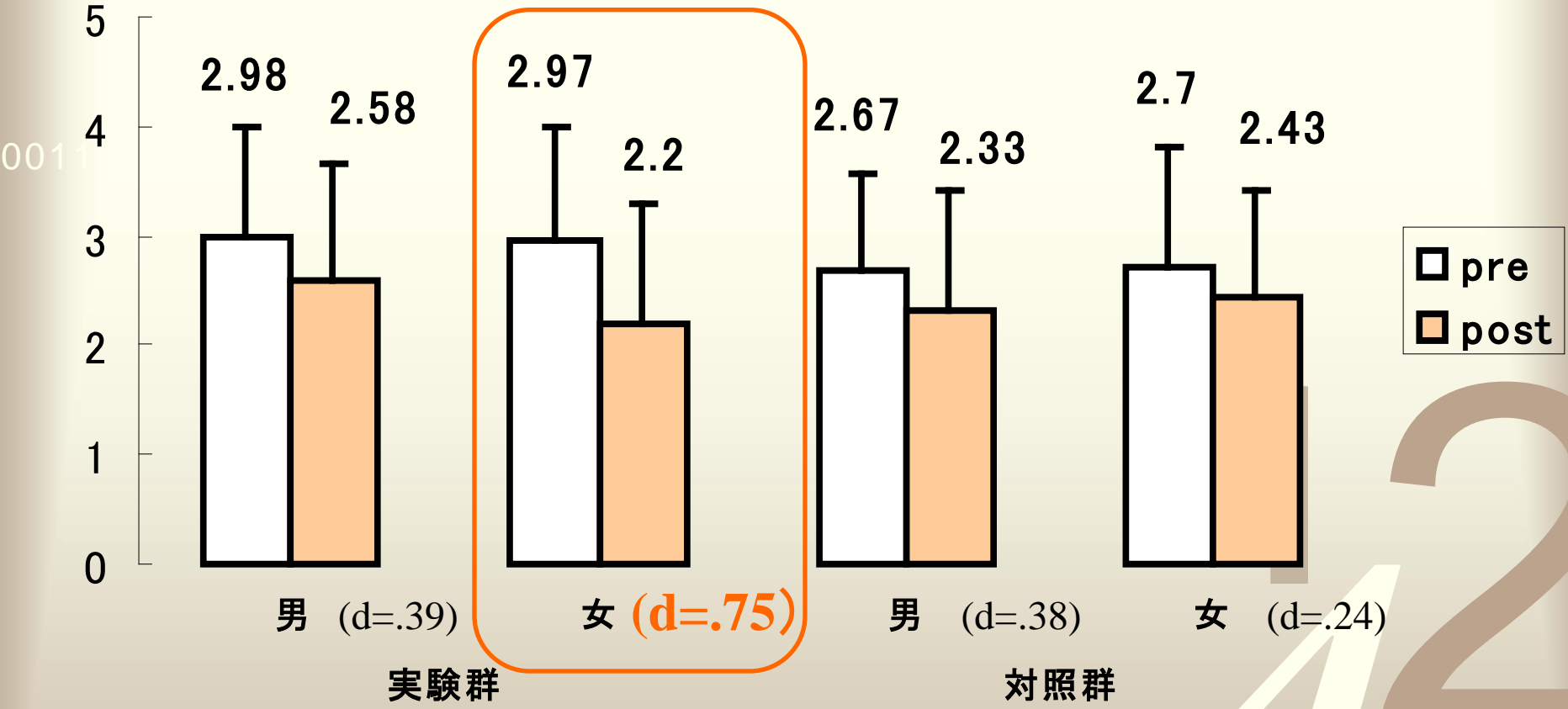
結果 性暴力の一般知識



- 時間の主効果 n.s.
- 時間×群の交互作用 女性のみ有意 $F(1,96)=9.458, p=.003$

※d=効果量ES

結果 被害者の責任の帰属(知人)



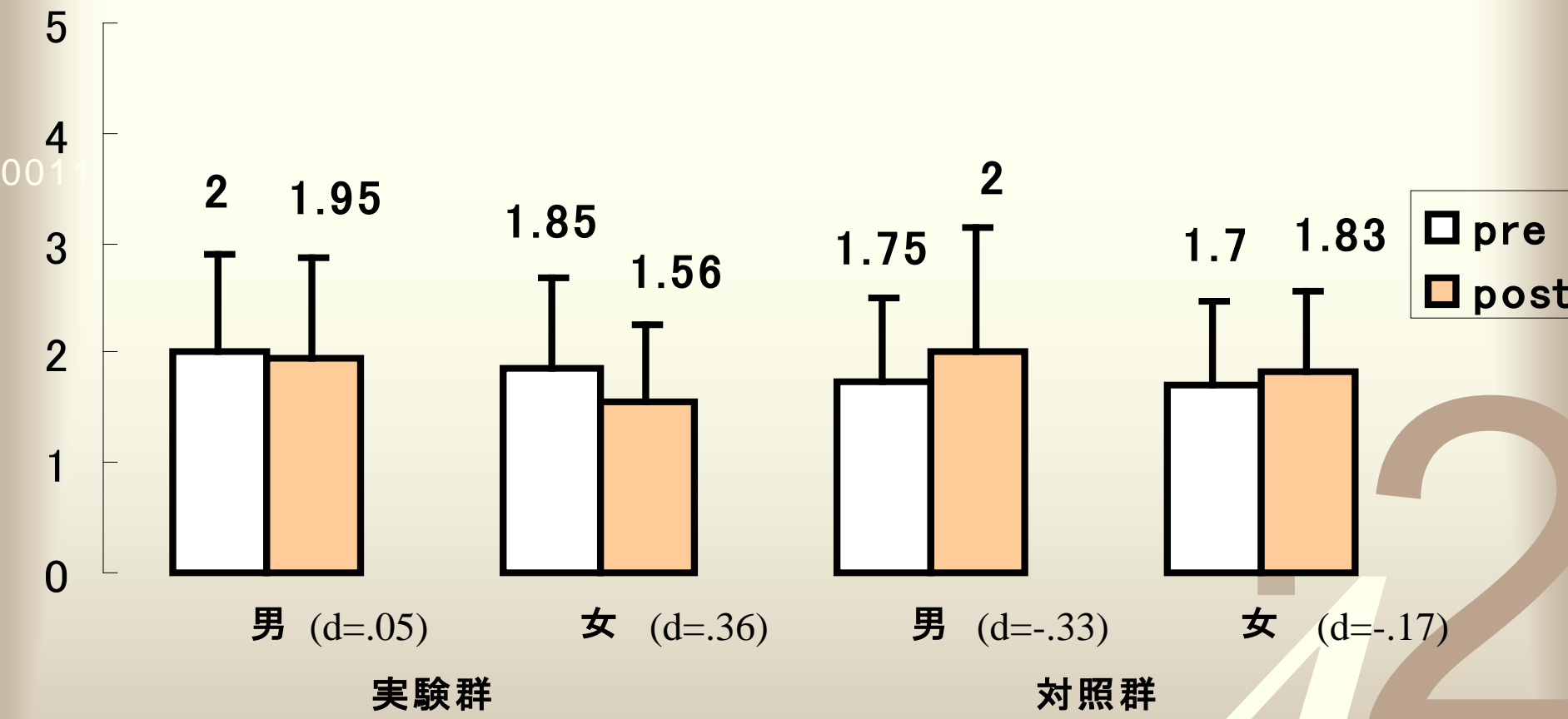
女性のみ 時間 × 群の交互作用あり $F(1,95)=7.03, p<.01$

→スライド視聴の効果が証明された

※d=効果量ES



結果 被害者の責任の帰属(デート)



女性のみ 時間 × 群の交互作用あり $F(1,93)=4.856, p<.05^*$
→スライド視聴の効果が証明された

※d=効果量ES

考察 教材の評価

○ スライド教材視聴の効果

0011 (対照群との比較による統計的検定による効果測定)

顔見知りによるレイプ(デートおよび知人)での被害者責任の判断に効果あり しかし効果は女性だけ
→顔見知りによるレイプが存在するという知識提供が
偏見を低下させる可能性が示された。

○ 効果量の比較

レイプ被害者に対する態度に対するエフェクトサイズは
対照群よりも大きくなった

→レイプ神話受容は、知識提供によって低下する可能性
が示された。

考察 メディア教材使用の利点と限界

00 利点： 侵襲性が低い

性被害に関連する調査での倫理的配慮の重要性
アクセスしやすく、再現可能性が高い など


限界：

レイプ被害当事者の深い理解には及ばない
長期的な効果があまり期待できない


すでに知識のある参加者にはそれ以上の効果が
望めない など

結論

＜総合考察＞

- 00  短時間での知識提供教材の視聴によって
レイプに関連する態度が変容する
→レイプに関する偏見の低減,
被害者への二次被害の可能性を低める

＜今後の課題＞

-  レイプ被害者への理解を深めること
→ 関係の中で起こるスティグマ低減のための
効果的な心理教育的予防プログラムの開発

主要引用参考文献

- Frese et al. (2004). Social perception of rape. How rape myth acceptance modulates the influence of situational factors. *Journal of Interpersonal Violence*, 19, 143-161.
- 石川義之 (2003). 性的被害とトラウマ—関西コミュニティ調査の統計分析—大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要2 139-159
- 片岡弥恵子 (2004). 性暴力被害に関する看護者への教育プログラムの評価 日本看護科学会誌24(1) 3-12.
- Lonsway, K.A., & Kothari, C. (2000). First year campus acquaintance rape education. Evaluating the impact of a mandatory intervention. *Psychology of Woman Quarterly*, 24, 220-232.
- 村本邦子 (2004) 性被害の実態調査から見た臨床的コミュニティ介入への提言 心理臨床学研究22(1) 47-57
- Payne, D.L., Lonsway, K.A., & Fitzgerald, L.F. (1999). Rape myth acceptance: exploration of its measurement using the Illinois Rape Myth Acceptance Scale. *Journal of Research in Personality*, 33, 27-68.
- 性暴力被害少年対策研究会 (1999). 少年の性暴力被害の実態とその影響に関する研究報告書 財団法人 社会安全研究財団助成研究事業
- 塚原睦子 (2004). 大学生におけるレイプ神話容認態度研究: 性に対する意識との関連 名古屋大学大学院(発達教育臨床コース) 修士論文 (未公開)